

『モウビイ・ディック』における
バルキンントンの問題

本 多 史 弥

『モウビイ・ディック』におけるバルキンントンの問題とは、いわゆる「作品の不連続性」にかかわる問題である。バルキンントンは作中人物のひとりだが、その描かれ方には不可解な点が多く、これまで批評家の関心をひいてきた。彼は物語の最初のほうで、語り手イシュメイルによって熱烈に賛美されながらも、なおかつ不自然な形で物語から姿を消す。

この作品は全部で一三五の章にわかれているが、そのうちバルキンントンが登場するのは、第三章と第二章のわずか二章にすぎない。そのうち、第三章では語り手のイシュメイルと偶然にすれ違うだけであり、ほとんど描写らしい描写はされないから、彼が登場するのは、実質的にはほぼ第二章のみと言ってもいいであろう。

第二章は一ページにも満たない短い章だが、語り手は、この章がバルキンントンの墓石なき墓であると宣言している。つまり追悼文、ということだが、追悼といっても死んだということではないから、語り手はこれ以後バルキンントンを二度と登場させるつもりがないから、ここで追悼したいと言っているのである。けれども、ここ以前にバルキンントンが活躍する場面などは少しもない。だから、彼はほとんど葬りさられるためにわざわざ登場しているかのように見える。

バルキンントンの不自然な登場と退場にはたいする批評家の見方は、これまでおおむね二つに分かれてきたと言っている。ひとつ目は作品の創作過程からの視点である。『モウビイ・ディック』は、一度原稿が完成した後で、大幅な書き直しが行われたのではないかとという疑いが従来もたれてきた。いわゆる「二つのモウビイ・ディック」説である。草稿が残っていないため、確証の得られない仮説に過ぎないが、そういった説となえる批評家は、テキストの至るところにみられる「形式の不連続性」を、さまざまな書き直しの証拠として挙げる。そして、バルキンントンの唐突な退場も、そのひとつであるとする。書き直し以前の原稿においては、バルキンントンがおそらく、最後まで活躍していたであろう、けれども修正後の現行テキストでは、彼の役割は、年老いたエイハブ船長に取って代わられたために、早々と姿を消すのだ、と言うのである。けれどもバルキンントンが本当に不要になったのであれば、登場シーンをすべて削除してしまってもよかったはずである。たとえわずかであれ、彼があえて登場してくるについては、それなりの深い意図が込められていると我々は考えていいように思われる。

もうひとつの見方は、「新批評」の伝統に基づくものである。文学作品を、自律した構造をもつ芸術作品として評価しようとするこれらの批評家たちは、あえてテキストの創作過程を度外視し、主題との関わりというに観点からのみバルキンントンの役割を見定めようと試みている。そして彼らの考えでは、バルキンントンは作中でもっとも理想的なヒーロー像であるということになる。バルキンントンは、メルヴィルの理想を体現した人物として、一度は描かれる必要があった、けれども理想的すぎて、これ以上描写す

ると作品のドラマを壊してしまう恐れがあるので、早めに消えてしまうのだというのが、おおむねこれらの批評家の見解である。

確かに第三章では、バルキンソンがまるで神のようにたたえられている箇所がある。彼らの解釈は、そのような箇所を根拠としているようだ。けれどもイシュメイルは、気分次第で言うことがコロコロと変わるくせ者であり、彼のいうことを顔面どおり

に受け取るのはいさば危険である。
はたして詳しく読み込んでみると、バルキンソンが語り手にたえられていくくだりでは、単にバイロンの反逆ヒーローのステレオタイプをなぞる形で、たたえられているにすぎないということが明らかに。そのようなステレオタイプが、メルヴィル作品における理想のヒーロー像であるなどは、到底認められない。

つまり以上をまとめると、第一の立場からは、バルキンソンがあえて登場する意味が説明できないし、また第二のタイプの批評家たちは、語り手の誇張癖に惑わされてしまつて、バルキンソンのキャラクターを読み誤っているということが言える。そこで我々は、第三の道を取りたいと思う。すなわち、創作過程の事情でもある程度考慮しつつ、バルキンソンがもっている独自の意義を（イシュメイルの誇張癖に惑わされないようにしながら）主人公エイハブとの関係の中に見いだしたいのである。

そこでまず注目しなければならない点は、バルキンソンの描写が決してこの章全体で一貫しているわけではない、ということである。彼がバイロン風の紋切り型であることは既に指摘したが、よく読むとそれは、あくまで章の後半部のことではない。章の前半部では、彼は暗い運命に苦しめられている惨めな存在とし

て描かれている。そしてこの二つの性質は明らかに矛盾しあっている。すなわちこの短い章のなかで、バルキンソンの顔は二つに分裂していると言えるのである。

なぜこのようなことが起こったのだろうか。おそらく、バルキンソンのもともとのキャラクターは、前半部の惨めな様子にあらわれているのであろう。けれども語り手は、彼をきれいに葬り去ろうと焦るあまり、途中から、かなり強引にバルキンソンをバイロンの栄光に包もうとして、次第に論理がねじれていつてしまったと考えられる。

そして、この前半部分にこそ、バルキンソンのもつ独自の意義を我々は見いだせるはずである。そこでバルキンソンが陥っている苦境は、主人公エイハブ船長が過去四〇年間耐え忍んで来た苦境と同じ性質のものであると考えられる。つまり、バルキンソンはエイハブが、現在の怒れる狂人になる以前の段階を提示するものとしての役割を果たしているのである。だから彼は、エイハブが登場するまえに一度は作品に現れねばならず、けれども、彼がそれ以上発展してしまうとエイハブになってしまうわけだから、船長が初めて登場する第二章以前に、急いで葬り去られなければならないのであろう、というのが私のバルキンソン解釈である。